わざわい転じて

日野西恵美子
北海道・71歳・自営業

天国の夫、資英さま。

去年の9月に、ここ札幌の自宅であなたの33回忌の法要を営ませて頂きました。奇しくも、私は古希の祝いの年でした。

京都黒谷からおいで下さったお坊さまが、

「この次は50回忌です」

とおっしゃるので、指を繰ると、私は、米寿となります。

「がんばってそれを目標にし、張合いとして生きますので、そのときはまた、ぜひ来て下さい」

と、厚かましくもお願いしました。

明日の命もわからない世に、米寿の日までの約束を取りつけるとは、何と面白いことでしょうか。

「恵美さんらしいね」

と、あなたには笑われてしまいそうですね。

でも、こうして70年も小児マヒの体とおつき合いしながら、丈夫に愉快に長生きできるのは、ただただおかげさまと申すほかありません。

歩けぬ子を、おんぶや、だっこで育ててくれた親兄弟の恩もさることながら、私にとっては、あなたさまと出逢い、二人の子供を授けて頂いたことの幸せから、人生のすべてが始まったといって良いように思います。

娘達が3歳と1歳の秋、あなたは病にて突然この世を去りました。呆然自失の私のふところに、生き生きと可愛らしい子が、宝物のように残されているのです。あなたを追いかけて死ぬわけにもいかないのでした。

今、振り返っても、そのあたりは、墨絵のようにおぼろに遠く、もう心の辛さも思い出せないぐらいの歳月が経ちました。

いつか私は本領発揮で、お得意科目の手料理の店をすすきのに開くに至りました。座ったままに、きりたんぽを作り、煮魚や玉子やき、お煮〆など……。おふくろの味の小さな店の、会話を良しとして、立ち寄って下さる方々に支えられて20年。

「わざわい転じて福となす」ことの醍醐味をしみじみと味わっております。

絶えず、あなたの名を呼びながら生きて参りましたが、もし、この次の世がありますなら、今度こそ、あなたと朝夕共に手を取り合い、顔を見交わしながら、一つ屋根の下で生涯を暮したいものとのひそかな願いを、これは、私のつかぬ愚痴だと聞き流して下さいませ。

あなたにどこかしら似た孫五人が、今は私の杖となってくれております。

※秋田県能代に生まれ、生後9ヶ月で小児マヒにかかり歩行困難、松葉杖で大きくなる。21歳で東京へ出て生活し結婚。夫と死別、2人の娘をかかえて北海道へ。現在すすきので、きりたんぽの店を経営し、早20年目に入った。